

神事芸能の細男について

せしむる

福原敏男

- はじめに
- 一 近畿の細男
- 二 九州の細男
- 三 諸国の細男

おわりに

論文要旨

細男（人間が演ずる芸能と傀儡戲）は日本芸能史上の謎の一つである。従来は九州の八幡宮放生会の視点より理解され、九州より近畿に伝播したという暗黙的理解があった。それに対して本稿では、人間の芸細男は奈良・京都の大寺社における芸能構成の一つとして成立した、とみる。東大寺では九世紀末、京の御靈会では一世紀にみられ、一二世紀には白面覆と鼓の細男が確認できる。

春日若宮祭礼でも平安期より祭礼に登場している。宇佐八幡宮放生会には、近畿より人間芸細男が伝播し、元寇撃退の神威発揚を象徴する儀礼として神話的意味付けられた。これは八幡縁起や縁起絵の変貌と軌を一にするものであった。柞原八幡や阿蘇の細男は宇佐より伝播した。大鳥社・諏訪社・杵築社へは、一宮・国衙型祭祀の一環として伝播した。

一方、鎌倉期には石清水八幡宮を中心に傀儡戲の細男が確認できる。それは大山崎神人が勤める日使頭祭において演じられ、二体の傀儡（武内と高良神）の打ち合わせである。鎌倉期の宇佐放生会にも傀儡戲が存在したが、これは細男とは認識されていない。宇佐の傀儡や細男は百太夫を祀った。柞原八幡の細男は傀儡戲ではないが、ここにも傀儡の痕跡があり、善神王や武内が傀儡の神であった。細男と傀儡とは不可分の関係であり、人間芸の細男舞は傀儡神を和ませる意味をもつていたといえる。宇佐の放生会頓宮における夷社や柞原八幡の浜殿における善神王や武内大神は、放生会に立つ市・市神としての夷・夷を斎く傀儡の関係を象徴している。